

本展は、骨董市に踏み込んだような雰囲気でご覧いただきます。ここでは、種類ごとに目玉の作品をご紹介します。

■ 寄木細工、木象嵌

寄木細工や木象嵌は、現在では箱根・小田原地方の伝統工芸として知られていますが、その誕生は江戸時代の駿河（現在の静岡県）でした。木材の色や木目の違いを利用して文様を描く寄木細工に対して木象嵌は曲線による表現が特徴です。本展では、屏風や衝立などの大型のものから小箱のような小型のものまで展示、日本の木工芸の緻密な美しさを紹介します。



Photo.01

寄木細工 ライティングビューロー／箱根
明治時代
幅241.0（拡張テーブルを開いた状態）×
奥行75.3×高さ181.0cm

Photo.03a



Photo.03b



寄木細工 レターボックス／静岡
明治時代
幅37.5×奥行30.0×高さ17.0cm
中蓋を開けると、03bのように梅と朝顔の
青貝文様が見られる。



Phot.04

木象嵌（木画） 二宮金次郎／高橋鶴五郎作／小田原
昭和15年（1940）
横43.0×縦68.7cm

■ 輸出陶磁器

1867年（慶応3）にフランスで開催されたパリ万国博覧会に出品された薩摩焼は、その巧緻、かつ華やかな色彩で高い評価を受け、「SATUMA」として日本を代表する銘柄になりました。1876年（明治9）に開催されたアメリカのフィラデルフィア万国博覧会の報告書には、有田、淡路、伊勢、京都、瀬戸、美濃、横浜、東京からの陶磁器の出品が記されています。この中でも、横浜の真葛焼や東京の隅田焼は、明治から大正時代くらいまで輸出陶磁器として華々しい歴史を残しました。展示では、大形の壺からカップ&ソーサーまで、様々な輸出陶磁器を紹介します。



Photo.02 真葛焼獅子図花瓶
明治～大正時代
胴径25.0×高さ22.0cm



Photo.05 薩摩焼武将図大花瓶
明治時代
胴径55.0×高さ125.0cm

■ 輸出漆器

日本の漆器は古くから貿易品として人気があり、江戸時代にはさらに高い評価を受け、輸出量も増加しました。そして明治維新以後は、駿河（現在の静岡県）と会津（現在の福島県会津若松市とその周辺）で外国人向けに大小様々な漆器が大量に制作され、横浜港などから輸出されました。漆器の中でも、薄く加工した貝片を工芸素材として用いた青貝細工は、主な産地として京都、長崎、静岡が知られていますが、昭和時代前期までは横浜でも作られていました。横浜で作られた青貝細工は輸出用工芸品の花形でしたが、現在その技術は途絶えてしまいました。



Photo.06 青貝細工 人物図写真帖／横浜
明治時代
幅35.5×縦27.5×厚さ6.0cm

■ 芝山細工

芝山細工とは、厚みのある貝を使って文様を表わし、象牙や漆面に象嵌したもので、下総（現在の千葉県）芝山出身の大野木専蔵という人物が技法を考案しました。作品が評判を呼んだため、大野木は江戸に出て芝山に改姓、多くの弟子を取り、芝山細工は発展しました。その後、横浜開港で外国人が多く来日するようになり、海外からの注文が増えたため、横浜に芝山細工の職人が集まり、制作されるようになりました。また、横浜で制作された芝山細工は横浜芝山細工と呼ばれることもあります。西洋人好みに作られた横浜芝山細工は、日本人の目には奇異に映るかもしれませんが、独特の雰囲気の魅力となっています。



Photo.07 芝山細工 豊年満作図衝立
明治時代
幅181.0×高さ116.0cm



Photo.08 芝山細工 飾棚
明治時代
幅123.5×奥行37.0×高さ204.0cm



Photo.09 芝山細工 花籠図小篋笥
明治時代
幅18.0×奥行7.0×高さ28.0cm

■ その他

麦わら細工



Photo.10

麦わら細工 シガー&シガレットケース
明治時代
幅18.0×奥行7.0×高さ28.0cm

貝細工



Photo.11

貝細工 孔雀
昭和時代後期
幅35.5×奥行17.0×高さ39.0cm

生人形



Photo.12

生人形
二代山本福松作「初代中村吉右衛門の北条高時」
大正12年（1923）
高さ70cm
竹日忠芳氏蔵